

プロセスを学ぶプロセス

く、どうとしか

法学部法律学科 専任講師

民事訴訟法を題材に、話し書く法的思考力を和気あいあいと鍛えています。
2010年に開講し、この3月に初めての卒業生を輩出しました。

民事訴訟の役割を平易な言葉で述べるとすれば、「採め事の解決」であり、その舞台は「お役所」である裁判所です。このように聞いただけで、近寄り難さを感じる方がいるかもしれません。同じ訴訟でも、刑事訴訟は、重大事件の公判の経過が詳細に報道されており、具体的な手続きを比較的イメージしやすいと思われます。他方で、民事訴訟に関する報道の多くは、最初と最後（訴えの提起と判決言い渡し）に著しく偏っていますし、刑事訴訟よりも書面の比重が大きいことも手伝い、公開法廷で行われているにもかかわらず、当事者以外にはブラック・ボックスの様相を呈しています。

そのように謎めいた（？）民事訴訟ですが、市民社会の権利や法秩序の実現を支える無形のインフラともいえるものであり、民事訴訟法が主要六法の一角を占めていることは伊達ではありません。実際の民事訴訟事件は、多国籍企業間の特許侵害訴訟から、痴情がもつれた慰謝料請求訴訟まで多種多様

であり、証拠と法に基づく知的論争の一面を持ちつつも、悲喜こもごもの人間ドラマにあふれています。当研究会は、そのような民事訴訟のプロセスを規律する民事訴訟法を研究対象としています。

いわゆる「リーガル・マインド」は、常識的な結論を導くバランス感覚もさることながら、そこに至るまでの破綻のない論理の組み立てこそが要諦といえるでしょう。私はゼミ生に対し、「わかりません」と言っただけで簡単にあきらめず、間違ってもよいから何かを発言するよう常日頃から促しています。最初は全く見当違いの答えであっても、他のゼミ生や担当教員の指摘を受けながら修正を図り、徐々に「当たらずと雖も遠からず」にまで漕ぎ着け、最終的に自分も他者も納得できる理由と結論に至るプロセスを大切にしています。担当教員である私も、しばしばゼミ生から果敢な挑戦を受け、法的論争の醍醐味を味わっています。

少数だからこそできること

もうずみ しゅん
両角 駿君 法学部政治学科4年

当研究会では、民事訴訟法についての理解を深めるべく、3年生は、先生に作っていただいた事例問題の検討を行っています。4年生は、各自が選んだテーマについて卒業論文の作成を行います。

工藤研究会は、3期目ということで歴史が浅く、3・4年生を合わせても11名（2011年度）と他の研究会に比べ少数ですが、それだけ先生や仲間との関係が密であることはもちろん、研究会では一人一人の発言する機会も驚くほど多く、議論も活発に行われます。私たちのどのような質問に対しても、先生が実務法曹として経験されてきたことを含めて親身に答えてくださるので、実際に法律がどのように社会で活用されているのかを知ることができます。



組織の動かし方、人の活かし方を探究する

よしだ えいすけ

商学部 教授

昨年度は、3年生9名、4年生9名が在籍。管理会計を中心に、ビジネスの仕組み、組織の設計・運営に関わるさまざまなテーマに取り組んでいる。

残念なことに、管理会計は人気があるとは言えません。商学部においても、戦略論やマーケティング論のような華やかさのある学問に対して、管理会計論は「会計」だから難しそうだし、「管理」だから暗そうだし、大事なものは分かるけど敬遠したくなるようです（苦笑）。

企業経営においても、商品企画・開発や営業のような華やかな部門に比べて、管理会計と関わりの深い経営企画部や人事部、経理部などはお堅いイメージかもしれません。

優れた管理会計実践がもたらすコスト競争力や戦略の実施能力の高さは、企業の競争優位の源泉としてとても重要なのですが…。

そもそも管理会計って何なのか分かりにくい。会社が大きくなると、社長一人で会社を動かすことに無理が生じてきて、誰かに任せる、人を育てる、予算を立てる、結果を評価する…といったことが必要になってきます。こうした仕組み・仕掛けが管理会計です。

言い換えると、仕事の分担の不公平感、会社からの評価への不満、非効率で無駄の多い仕事の進め方、コストと品質の両立の難しさ…こうした問題の解決を探究するのが管理会計の役割であると私は考えています。

研究会では、こうした管理会計を教え込むというのではなく、研究会が学生の学びの「場」となることを意識しています。もともと管理会計は組織の動かし方、人の活かし方を探究する学問ですし、研究会では自主性と他者との関わりを重視しています。

実際の活動も、個人研究、グループ研究、時事問題解説、他校ゼミとの研究発表会、工場見学、その他の持ち込み企画など、学生との対話を通じて、毎年、違った取り組みをするようにしています。

人生の先輩としては、学生たちが、自分を知り、他者を知ること、社会に出てそれぞれの幸せを見つける準備の手助けができれば本望だと考えています。

こんにちは、吉田ゼミです

さわむら みづき

澤村美月君 商学部4年

私たち吉田ゼミは、3・4年生が各9人のアットホームなゼミです。毎回担当の者がプレゼンテーションを行い、それに対して皆で意見交換をします。普段は和やかな雰囲気の中、吉田ゼミですが、このときばかりは互いに本音でぶつかり合う活発な議論が展開されます。

吉田先生はゼミ生との距離が近く、一人一人を本当に大切にしてください。また、それぞれが持つ個性や特徴を真に理解してくださっています。先生の的確かつ明快なアドバイスは、ゼミ生の知的成長はもちろん、人間的成長をも促してくれるものです。

素晴らしい先生、先輩、そして同期の仲間たちに恵まれ、充実したゼミ生活を送ることができ、本当にありがたく感じております。



電子の創発的な舞台を設計し、創発機能を発現させる

【**的場正憲**】

理工学部物理情報工学科 教授

従来理論の予想をはるかに超える創発機能（高温超伝導、高効率熱電エネルギー変換）が発現する物質をデザインし、エネルギー問題の解決を目指します。

創発とは、個々が互いに相互作用をしあい、複雑に組織化することで、個々の要素の振る舞いからは予測できないような性質が全体として現れることです。例えば、高い知性をもたないアリが、群れとしては創発的な共同作業（巣作り、仲間の墓作り、ゴミ捨て場作り）をすることが知られています。群れることは、決して悪いことではなく、創発的な場の形成につながるのです。相互作用が強そうな「ちょいワルおやじ」的な学生集団や電子集団でも、予想をはるかに超えた特性が創発的に発現すると期待しています。教育（人材育成）でも、物質探索・設計（電子の舞台設計）でも、創発は重要なキーワードだと思えます。

電子は負の電荷をもった粒子であるため、電子間には互いにクーロン反発力が働きます。しかしながら、通常の金属や半導体といった固体中ではこのようなクーロン反発力は比較的小さく、電荷を運ぶキャリアは空間的に広がった波として表すことができます。従来の半導体エレクトロニクスでは、この

ような互いに独立した波が運ぶ電流を制御して、さまざまな機能を発現させています。

一方、クーロン反発力が大きく無視できない場合に、電子が各サイトにほぼ一個いるような状況下では電子はほとんど動けなくなります。しかし、うまく電子の抜け穴（正孔）を作ると、多くの電子が互いに強く相関をもって動けるような「悪い金属（Bad metal）」的な状況が生まれます。

従来理論の予想をはるかに超えた高温超伝導という現象もこのような状況下で発現しています。このような「悪い金属」中の環境は、電子にとって創発的な（予期せぬ新しい性質が発現するような）環境であると考えられます。言い換えれば、「悪い金属」には、電子が創発的に活躍できるような舞台があるので。このような活躍を、お勉強ができる「真面目な学生」たちではなく、「ちょいワル学生」たちに期待しています。研究紹介動画：<http://www.youtube.com/watch?v=kMsaliGCdOc>

素敵な創発機能デザイナーになりたい！

たな き ま い
棚木麻衣君 理工学研究科修士課程1年

Dr.マトー研究所（的場研）の勉強会で、電子の世界にも、雑誌『LEON』に登場するような、ワイルドでたくましいパンツェッタ・ジローラモ氏のような「ちょいワルおやじ」的な電子が存在することを知りました。このような「ちょいワルおやじ」的な電子集団の舞台では、その個性が互いにぶつかり合うことで、世間の予想をはるかに超えたすてきな「創発的ダンス」が披露される可能性があります。私たちは、「ちょいワル金属」における創発的舞台上で、ワクワクする（従来理論の予想をはるかに超えた）パフォーマンスを披露できるような舞台プロデューサー（創発機能デザイナー）になりたいと思います。



医療への貢献を目指して！楽しい基礎研究

物理化学と聞くとちよつと苦手と思うかもしれませんが、研究は楽しいです。大学院生7名、学部6年生9名、5年生8名、4年生2名が在籍しています。

かなざわひでこ
金澤秀子

薬学部 教授

創薬物理化学講座では、外部の環境変化を認識して性質を変化させる機能性高分子を合成し、ドラッグデリバリーシステム（DDS）、生体可視化プローブ、分離システムなどに応用しています。機能性高分子をデザインし、自ら開発した新しいシステムを用いて医療への応用を展開していく研究です。で、試行錯誤の連続ですが、副作用が問題となる抗がん剤の量や投与回数を減らし、患者さんの負担を軽減するDDSの創製を目指して研究に取り組んでいます。これまで開発した分離システムなど一部は実用化されており、基礎研究といっても医療への貢献を目的に、創薬から臨床まで幅広い分野に関わる研究を、実学志向で進めることができます。企業や他大学との共同研究も行っており、国内外で研究成果を発表しています。また、研究室の卒業生の進路は、製薬企業、化学系企業の研究者から病院薬剤師までさまざまです。基礎研究では100努力しても報われるのは1以下です。特に私の研究室

は、新しい材料の設計・合成から応用研究まで行っているため、オリジナリティーの高い研究ができるものの、ゼロから立ち上げるような研究も多く、学生が研究室に在籍している間に成功するとは限りません。その代わり、成功した時には大きな達成感が得られます。実験は誰にでもできますが、それはまだ研究とは言えません。研究室は、「研究とは何か」を学ぶ場所であると思います。研究者は、常に新しい目標を定めて、わくわくしながら困難に立ち向かっています。研究は挫折の連続で、時にはめげてしまうこともありませんが、落ち込んでいては研究は続けられません。すぐに気持ちを切り替えてポジティブ思考で、とにかく実験してみることが大切です。このような経験は、将来研究者にならなくとも、社会で新しい仕事に挑戦するときにも通じるものがあると思います。困難が多くても、それが社会に役立つことであれば、自分を信じ強い意思をもって頑張っ

革新的なDDS開発を目指して

きむらこしこ
木村琴子君 薬学部薬学科6年

「よく昼休みにみんなで運動しているよね」「研究室のクリスマスパーティーが豪華！」友人からはよくそんな言葉をかけられますが、当研究室は、研究にももちろん熱心に取り組んでいます。

当研究室は、「がん温熱療法への応用を目的としたDDS開発」「温度応答性クロマトグラフィー開発」などの研究を行っています。

先生は、私達学生に対し常に愛情を持って接して下さいます。毎週の研究報告では、研究に関するアドバイスはもちろん、製薬企業を目指す学生・薬剤師を目指す学生など一人一人の将来を見据えたアドバイスも下さいます。温かい先生のご指導の下、今後も革新的なDDS開発を目指していきます。

